

## 標題

キルギス共和国地方都市における障害者の所得創出活動にみる共同性

工藤 正包

## 研究の目的と方法

キルギス共和国は、1991年に旧ソ連から独立した後、急速な市場経済路線へと舵を切った。産業が未発達、かつ資源に乏しいキルギスでは、独立後の経済は混乱を極めた。追い討ちをかけるように物価は高騰し、教育、医療、社会保障の老朽化が相まって、移民や出稼ぎが増加している。

筆者は、2年間、キルギスの障害当事者団体において活動する機会を得た。旧ソ連時代の障害者の多くは、年金によって十分に生活を維持する事ができていたと言われる。しかし、物価が高騰したことや家族の収入が相対的に減少したこともあり、多くの障害者は、年金以外の収入源を確保する必要性に迫られている。

しかし、比較的民主化が進んでいるキルギスでは、障害当事者団体が多く設立され、国外の援助団体の支援を受けながら、活発化している。また、国家による社会参加や就労への支援が乏しい中で、数少ないながらも、小規模事業や自己雇用により収入を得ている障害者も存在する。彼らの多くは、友人や知人とのつながりを通して、所得創出活動を行っていた。

近年、社会保障をめぐる議論において、所得保障のみでは不十分であり、社会的な承認を得られる場の必要性が求められている。つまりは、周囲の人々とともに生きる場である。そこで、本研究では、独立後の社会変動の中、医療や年金制度が機能低下をきたしているキルギス共和国において、所得創出活動を行っている障害者が如何にして所得創出活動を獲得し、維持しているかを明らかにする事を目的として挙げた。特に、所得創出活動の獲得、維持のプロセスにおける周囲の人々とのつながり、絆といった共同性に注目し、その意義と限界について分析することとした。

研究方法は、文献研究と計2回の現地におけるインタビューである。キルギスの歴史的背景、経済、雇用状況、社会保障制度は主に文献調査により情報を収集した。キルギスの障害者関連の情報は、国際援助団体や現地障害者団体の報告書から得た。現地調査はカラコル市とカラコル市近郊の村において、対象者に半構造化インタビューを実施した。インタビューは地方行政官、ソビエト時代を知る高齢者、障害者団体の代表者と所得創出活動を行っている障害者などに実施した。

## 論文の構成

### 第1章 序章

- 第1節 研究の背景
- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の方法
- 第4節 論文の構成

### 第2章 障害者の所得創出活動の理論的検討

- 第1節 開発途上国における障害者の所得創出活動
- 第2節 開発途上国における地域社会のセーフティーネット
- 第3節 本論文の理論的枠組み

### 第3章 キルギス共和国の国民生活

- 第1節 キルギス共和国の概要
- 第2節 独立までの歴史
- 第3節 独立後の変化

### 第4章 キルギス共和国の障害者を取り巻く状況

- 第1節 障害分野におけるソビエト体制の遺産
- 第2節 キルギス共和国の障害者統計
- 第3節 障害者への社会保障制度
- 第4節 障害者関連政策の概要
- 第5節 障害者の生活状況の事例

### 第5章 カラコル市及び周辺地域における障害当事者団体の活動

- 第1節 キルギス共和国の障害当事者団体の活動
- 第2節 カラコル市および周辺地域の障害当事者団体の活動

### 第6章 障害者の生活状況と所得創出活動の事例

- 第1節 雇用と生活に関するインタビュー調査の方法
- 第2節 インタビュー結果
- 第3節 インタビュー結果の分析

### 第7章 考察と結論

- 第1節 まとめ
- 第2節 考察
- 第3節 結論

## 論文の概要

本論文では、旧ソビエト時代に手厚い社会保障制度により生存権を保障されたが、保護・隔離されていた障害者が、独立後に市場経済の荒波にもまれながら、どのようにして社会参加を成し遂げ、生活基盤を築いているのかを、所得創出活動を行う障害者のインタビューを通して明らかにすることを目指した。

第1章では、本論文の研究の背景を述べ、研究課題の目的を論じ、論文構成と研究方法を示した。

第2章では、障害者の所得創出活動の理論的検討を行い、キルギスの障害者の所得創出活動が、周囲の人々とのケアによって成り立っている可能性を指摘した。そしてケアと共同性の理論から、所得創出活動を行う障害者と障害者を含めた周囲の人々との間に、新たな共同性が生成されるという仮説を構築した。

第3章と第4章において、旧ソ連時代の障害者は、保護・隔離政策の下で、十分な年金と安価な物価によって、生存権は保障されていた。しかし、独立後は市場経済の導入に伴って、年金のみで生活する事が困難となり、年金以外の収入源を確保する必要性に迫られている事を示した。そして、キルギス政府は、年金や手当といった社会サービスの拡充を図っているが、それは、生活を保障する上で十分ではなく、巨大な財政赤字をみても、持続可能性に問題を抱えている事を指摘した。

第5章では、カラコル市及び周辺地域の障害者団体の活動の分析をとおして、2004年に障害者団体Aが開設されてから、障害者同士の結びつきが生まれていった事を明らかにした。その活動は、障害者団体Aが中心的な役割を担っているが、それぞれの団体は独立して、事業を行っているという特徴を持っていた。

さらに、政府や国内企業、そして障害者団体も、従来の慈善アプローチを踏襲するように、一方的な現物支給を行っている事がわかった。しかし、その一方で障害者団体が主体的に行う活動や事業によって、政府や地域住民が「巻き込まれている」様子が浮き彫りになった。意図的か非意図的に関わらず、周囲の人々のケアによって障害者の社会参加が保障されるという、障害者と地域住民との新たな関係性が形成されている事も明らかになった。

第6章の障害者の所得創出活動と生活状況のインタビュー結果は、障害者団体の中で醸成された障害者同士の関係が、女性障害者の自尊心の獲得につながっている可能性が示唆された。また、50代の中途障害者が行う事業が、若年層の先天性障害者の雇用の受け皿となっている事がわかった。そして、雇用という実質的な社会への参加

が、年上の障害者のケアによって保障された事で、若年層の障害者達が本来有していた能力が引き出されていった様子が浮き彫りとなった。そして、雇用形態と労働形態の分析からは、インフォーマルセクターの持つ「多様な労働形態を包含する」機能が、雇用における障害者の包摂に寄与している事が示唆された。具体的には、身体的な特性や居住地に合わせて、趣味や特技を生かすことができるように、自ら所得創出活動を紡ぎだし、周囲の環境を構築している事が明らかになった。

障害者の所得創出活動が、障害者と周囲の人々との関係構築と関係性の深化に寄与している可能性が示された。漁師の事例と縫製品の製作・販売を行っていた事例では、家族や親族、隣人を通じて常連客を獲得し、安定した販路を獲得していた。また、木工品を売る障害者には、購入者のネットワークが存在する可能性が示唆された。そして、多様な所得創出活動を展開してきたインフォーマントMは、所得創出活動を含めた団体での活動などを通して、周囲の人々と関係を構築し、さらに、新たな所得創出活動や日常のケアの獲得へとつなげていた。

以上の事より、本論文の結論として、調査地における障害者の所得創出活動にみる共同性は、障害者の年金以外の収入と、彼らの「生きる場」の形成に寄与しているということが導きだされた。旧ソビエト時代から引き継がれたキルギスの社会構造が、社会から障害者を排除するように機能している中で、所得創出活動とケアとの二つの要素が、障害者の「生きる場」の生成に寄与していることが示唆された。

しかし、個別の小規模な所得創出活動は、所得保障の面では不十分であるという限界も明らかになり、障害と所得創出活動の多様性によって、所得や生活状況の相違が生じている。それらを考慮した年金や給付金制度の設計が必要である。そして、人々の間での共同性の形成と障害者の主体的な所得創出活動を展開していくために解決すべき課題として、障害者団体における利権の集中と分配の問題がある事が示された。

地域住民の共同性によって担保されている障害者の主体的な所得創出活動は、基本的に「非制度的」な取り組みである。それを、国家の社会保障制度とキルギスの歴史に根ざす社会的規範が支えていくことができるか。それが今後のキルギス障害者支援の課題といえるだろう。